

『フラヘン・エン・メデデーリンゲン』誌と南方熊楠 ——『フーツ・アンド・クエリーズ』誌から派生した雑誌群の分析へ向けて——

志村真幸

はじめに

南方熊楠の英文論考のほとんどは、『フーツ・アンド・クエリーズ』誌 (Notes and Queries、以下『N&Q』と略記) と『ネイチャー』誌に掲載されている。しかし、一篇だけ、『フラヘン・エン・メデデーリンゲン』誌 (Fragen en Mededeelingen、以下『フラヘン』と略記) というオランダの雑誌に出た論考がある。Man who painted the Lamb upon his Wife's Body と題する、浮気を主題にした笑話を東西で比較したものである。では、この『フラヘン』とはどのような雑誌で、なぜ熊楠が投稿することになったのか⁽¹⁾。

『フラヘン』について分析するには、まず『N&Q』を見なければならぬ。第二節で詳しく見るように、『フラヘン』はオランダ版『N&Q』としてつくられたものだったからである。

熊楠は『N&Q』に四〇〇本以上の論考を投稿し、うち三三四本が掲載された。ところが、これだけ大量の論考があるにもかかわらず、先行研究はほとんど存在しない。『ネイチャー』については良く知られ、

研究も少なくないが、実際には『N&Q』への投稿数のがはるかに多く、また晩年まで継続されたのである (『ネイチャー』掲載論考は五〇本、一九一四年／『N&Q』は三三四本、一九三三年)。ところが、『N&Q』掲載論考についての研究は、『ネイチャー』掲載論考との関係、初掲載論考の検討にとどまり⁽²⁾、ほとんど手が触れられずにきた。その原因は、論考の内容が雑多であるほか、この雑誌の特殊な性格が壁となったものと思われる。『N&Q』は読者投稿による質疑応答雑誌であったため、熊楠の論考だけを読んでも内容が理解できない。前後の質問や応答と合わせての分析が必要なのである。また、あまりにも雑多なテーマが混在しており、投稿者にもアマチュアが多く、学問として結実した部分が少ないため、『ネイチャー』とくらべて注目されず、周辺の雑誌とみなされたきた。しかし、現在、一九世紀後半から二〇世紀初頭にかけて、『N&Q』に類似した雑誌が大量に発行され、そこに投稿する研究者やアマチュアが広範囲に存在していたことが明らかになりつつある。この点については第三節で扱うが、『N&Q』は、けっして特殊でも限定的でもない雑誌だった

のである。そして熊楠についても、こうした雑誌空間のなかで再考する必要に迫られている。

本稿で扱う『フラヘン』も、『N&Q』から派生した雑誌のひとつであった。そのため、『フラヘン』と『Man who painted the Lamb upon his Wife's Body』を分析すること^②、『N&Q』的世界の広がり を明らかにし、また『N&Q』自体を逆照射することが期待されるのである。

本論に入る前に、『N&Q』が読者投稿誌であったこと、ノート、クエリー、リプライという独特の仕組みを持っていたことについて触れておきたい。『N&Q』の特徴は、全員が読者投稿で埋め尽くされていることにある。誌面は「ノート」、「クエリー」、「リプライ」の三つの欄に分けられる。ノート(N、短報)は投稿者の発見した知識や情報を提示するもので、現在の学術論文に近いものから、ごく簡単に事例を挙げたものまで多様である。クエリー(Q、質問)は、広く情報を求める問いかけのことで、短文が多い。リプライ(R、応答)は、クエリーへの返答であり、長短さまざまであった。ノートにリプライが付くことも多い。リプライは一本だけでは終わらず、数十人から寄せられることもあった。何年にもわたってリプライが続くこともしばしばで、先行するリプライへの訂正が行われたり、議論となることも少なくない。もちろん、まったくリプライの付かないクエリーもある。なお、熊楠は中山太郎宛書簡(一九二六年一月三〇日付)で『N&Q』のことを「随筆問答雑誌」^③と表現しているが、現在のインターネッ ト上の掲示板を想像してもらうのが分かりやすいかも知れない。

これを踏まえたくうえで、『フラヘン』の分析へと進みたい。なお、『フラヘン』、および『Man who painted the Lamb upon his Wife's Body』についての先行研究は存在しない。平凡社版『南方熊楠全集』一〇巻に本文が収録され、岩村忍が簡単に紹介しているが、巻号や人名に誤りがあるなど、あまり信頼できるものではない。

一 熊楠の寄稿

熊楠の手に『フラヘン』の創刊号が届いたのは、一九一〇年二月一九日のことであった。この日の日記に「荷蘭Arnhem, J. F. Bense, 'Vragen en Mededeelingen' 初号一冊(一月七日出)」^④と記されている。これについて、二月二四日の『牟婁新報』に、「南方氏の燕石考―十三ヶ国の国語にて書けるもの」という記事が出ており、「明治三十一年羅馬市に於て萬国連合東洋学会を開催の節、当時南方熊楠氏はロンドンに在学中なりしがロンドン大学総長デツキンス男の紹介にて此学会に燕石考を提出せり、此燕石考は十三ヶ国の国語を以て起述せるものにして南方氏が心血を瀉げる大著述なるが当時此論文を審判するものなかりし為め世に現はれずして止みしといふ、然るに今回和蘭国アーヘム市に於てベンセ氏編輯長となり「フラーゲン、エン、メツデツデーレンゲン」(文学考古学史学博言学に関する学識交換雑誌)を発行する事となり既に去月七日其第一号を発行せしが在東京和蘭国公使館書記ステツセル博士の懇請により南方氏は此雑誌の特別寄書家たる事を承諾し今後同雑誌に件の燕石考を発表せらる、由、氏の語る

所によれば此著は明治十八年稿を起し爾来二拾余年間研究を継続し今尚ほ執筆しつゝあるものにて氏に取りては最も快心の著述なりと、此論文の一部は遠からず本邦の人類学雑誌にも掲載せらるべしといふ⁽⁵⁾と書かれている。ペンゼからオランダ公使館のステッセルを通じて熊楠へ寄稿依頼がなされたのであった。このことは「Man who painted the Lamb upon his Wife's Body」の概要を紹介した「馬に関する民俗と伝説」(『太陽』一九一八年)にも、「右は東京の蘭国公使館書記官ステッセル博士の請に任せ、一九一〇年発行『フラゲン・エン・メデデーリンゲン』へ出した拙稿の大意である」⁽⁶⁾と書かれている。ペンゼではなく、ステッセルが熊楠を選んだ可能性もある。しかし、創刊号に添えられていたであろうペンゼあるいはステッセルの書簡は現存せず、詳細な経緯は分からない。ともかく、オランダの雑誌からわざわざ投稿依頼が寄せられたことは熊楠にとって国際的な評価を与えられたも同然で、すぐさま原稿を用意しはじめたのであった。こうして「燕石考」を寄稿するつもりであった熊楠だが、結局、こちらには取り止めにしてしまう。その間の事情は日記等からも読み取ることではできないのだが、代わりに書かれたのが「Man who painted the Lamb upon his Wife's Body」であった。五月二三日の日記に「終日 Bense 状 Man who painted the Lamb upon his Wife's body 認め出す。…牟婁新報「姦夫笑話の研究」草す。本日ベンセ氏へおくれる文の訳也」⁽⁷⁾とある。ペンゼのもとに届いた原稿は、六月一七日の『フラヘン』二四号の巻頭論文として掲載された(『Mededeelingen 欄』)。この号の目玉であった「ハレー特集」(同年四月二〇日にハレー彗星

が最接近した)の前に置かれており、きわめて丁重な扱いを受けていることが分かる。なお、オランダの雑誌ではあるが、熊楠の論文は英語で書かれたものがそのまま掲載された。熊楠はオランダ語ができなかったようで、一八九六年八月一三日の『ネイチャー』に掲載された「マンドレイク」補足では、「私の理解の及ばないオランダ語」⁽⁸⁾と述べている。

五月二三日の日記中の「牟婁新報「姦夫笑話の研究」草す。本日ベンセ氏へおくれる文の訳也」は、五月二七日と三〇日に分載された『牟婁新報』の記事「雑誌メッデデーリンゲン、エン、フラゲンに寄せたる南方先生の情話」に当たる。「神社合祀論を以て天下を震駭せしめたる南方熊楠先生は、常々顕微鏡を相手に薔苔の研究に余念もなきに、何しろ非凡の精力を有する先生の事にて前年帰朝以来内外の典籍を調べ東西の古話俚伝の比較に勉められ一昨年六月の『早稲田文学』には「大日本時代史に載する古話三則」の長篇を掲げられ其他欧米諸国の雑誌や会報に面白い情話を盛んに掲載せらるゝ、左に掲ぐるものは数日前、先生が英文に草して和蘭国の雑誌「メッデデーリンゲン、エン、フラゲン」に寄せたる情話の梗概なり」⁽⁹⁾として、以下、「Man who painted the Lamb upon his Wife's Body」の概要が紹介されている。本稿では、末尾に参考資料(二)として、「Man who painted the Lamb upon his Wife's Body」の翻訳を収めたので、詳しくはそちらを参照されたい。

内容は、まずイギリスの *A Hundred Merry Tales* (一五二五年頃) から、ある画工が旅に出るにあたり、かねてから不貞を疑っていた妻

のお腹に、用心のため羊の絵を描いておいたが、帰ってきてみると、角のない羊を描いたはずが、いつのまにか二本の角を生やした羊の絵になっていたという話を取り上げ、これをA・コリングウッド・リーの *The Decameron, its Sources and Analogues* (一九〇九年) に出ているヨーロッパの類話と比較し、さらに日本の無住道暁による『沙石集』(二二八三年) に、より早い時代に書かれた類話があるのを指摘している。こちらでは寝ていたはずの牛が立ち上がったっている。熊楠がしばしば行った東西の説話を比較する研究のひとつで、東洋の例が西洋より三〇〇年も先行していることを示そうとした点に眼目があった。

熊楠は「Man who painted the Lamb upon his Wife's Body」を何度か日本語に書きなおしており、「羊を女の腹に画きし話」として『民俗』(一九一三年五月の一年一報、一九一四年四月の二年二報)に掲載、さらに追補されて、一九二六年に『続南方随筆』に収録された。『民俗』掲載時には、中国の『笑林広記』から蓮の花を描いたはずが消えてしまっていたという類話が加えられた。『続南方随筆』では、吉備慶三郎から教えられたという和歌山市の類話二篇(描いた鶯が移動した話、玄米が白米になった話)が追補されている。また、前述「馬に関する民俗と伝説」(『全集』一卷二三三〜二三四頁)、「西暦九世紀の支那書に載せたるシンダレラ物語」(『東京人類学会雑誌』三〇〇号、一九一一年、『全集』二巻一二四〜一二五頁)、一九一二年三月二九日付の柳田国男宛書簡(『全集』八巻二八八〜二八九頁)にも、概容が紹介されている。ただし、これらは英文とくらべるとかなりの省略と

追補が認められ、原文にもっとも忠実なのは、新聞記事「雑誌メツデーリリングエン、エン、フラゲンに寄せたる南方先生の情話」となっている。

『フラヘン』に掲載されたのは「Man who painted the Lamb upon his Wife's Body」だけであったが、実は熊楠はほかにももう一本、『フラヘン』に投稿している。六月二〇日の日記に、「蘭国雑誌メデーリゲン・エン・フラゲンへ投書 Notes on Boccaccio's Decameron を認めにかかる」¹⁰とあり、七月一日に「フラゲン・エン・メデーリゲン」に寄る「デカメロン」附記論文、十二夜かかりしなり。参考書十六種。英4、仏2、独1、伊1、和6、漢2」¹¹と完成、そして翌日「Bense 氏へ状認めおはる。Notes on Boccaccio's Decameron 十五葉也。下女して午後五時書留にて送る」¹²と発送しているのである。しかし、この論考は未掲載に終わった。というのも、『フラヘン』は六月二四日発行の二五号で廃刊となっていたためである。南方熊楠顕彰館には、一九一〇年七月二四日付のベンゼからの葉書(消印も同日)と、翌二五日の消印のある空の封筒が残っている。葉書には、廃刊になってしまったことの謝罪が書かれ(本稿の末尾に参考資料(一)として翻刻した)、空の封筒には返送された熊楠の原稿が入っていたものと考えられる。しかし、これらについては日記等に記述が見られない。手紙の届いたであろう八月末から九月初頭には、熊楠は神社合祀関係の事件で収監されてしまっていたのである。また、『ネイチャー』への投稿が不採用になった際にも、熊楠は無視の姿勢を取ることがあった点も考えあわせる必要があるかも知れない。

返送された原稿は、九月二三日にコリングウッド・リーへ転送されたようで、この日の日記に「A. C. Lee 状一（先日和欄フラゲン・エン・メデーリングエンより返送の草稿おくる）」⁽¹³⁾とある。残念ながら、リーに送られた原稿がどうなったのかは不明である。ただし、内容については、五月一七日の日記にある「Boccaccio, Decameron, Day 3 Novel 3 に似たる独逸話、後家己れのほれた男子己れに逼ると教師に告て、己れの室に忍び入る法を其男に伝る話に似たる日本話を、昨夜おそくなる迄西鶴の書に付き探りしも見出す、今日漸く朝から午後二時迄かかりて、一洞の寛闊大臣気質、三の巻三章より見出す」⁽¹⁴⁾が該当するようである。これはもとより「The Decameron: its Analogues and Parallels」のタイトルで、『N & Q』投稿用に準備されていたものなのだが、途中で『フラヘン』用に切りかえられたのであった。

ここでひとつ注意しておきたいのは、この二本があらさまに性的なテーマを取り上げている点である。本稿末尾の翻訳を見ていただければ良く分かるだろう。実は『N & Q』は性的に倫理的であり、露骨な記述を含むような論考は採用されにくかった。ところが、それが『フラヘン』では受け入れられたのである。イギリスとオランダの国情の違いかも知れないが、この点は熊楠にとって大きな意味を持った可能性がある。

熊楠の投稿については以上である。つづいて『フラヘン』という雑誌そのもの、また熊楠が投稿を要請された理由について見てみたい。

二 『フラヘン・エン・メデーリングエン』誌

『フラヘン』は、J. F. ベンゼ (Johan Frederik Bense) がオランダのアーネムで発行した雑誌である。一九一〇年一月七日に創刊、週刊で発行されたが、六月二四日に二五号を出したところで廃刊となった。発行数、購読者数は不明だが、短期間で廃刊となってしまったこと、投稿者の顔ぶれがいつも少数のきまつたメンバーに限られることなどからすると、かなり少なかったろうと思われる。本稿では創刊号を中心に取り上げ、熊楠の論考が掲載された二四号についても触れることにする。

コンセプト、体裁ともに『N & Q』をそっくり真似た雑誌で、サイズ、表紙のデザイン、誌面など、『N & Q』と見間違えんばかりである。本家と同様、誌上での情報交換を目的とした雑誌で、読者から投稿された論考によつて全頁が構成された。創刊号冒頭でベンゼが発行の企図を記しており、それによると「この小雑誌の目的は、歴史学、考古学、系図学、地理学、民俗学、言語学、文字学、書誌学、文学上の興味深い問題について、投稿者間で協力しながら継続的に研究していくことにある」⁽¹⁵⁾とされ、表紙にも「歴史学、考古学、地理学、民俗学、語源学、書誌学のための雑誌」と明示されている。『フラヘン・エン・メデーリングエン』という雑誌名⁽¹⁶⁾は「質問と通信」の意味で、内容も『N & Q』のノート、クエリー、リプライの形式を踏襲し、「Mededeelingen (通信) 欄」「Vragen (質問) 欄」「Antwoorden (応答) 欄」の三つからなっている。オランダ語で書かれた論考が多

いが、英語、フランス語のものも見られ、投稿規定ではドイツ語も認められている。途中からはイド語（エスペラント語を改良した人工国際語）も加えられた。この点に『N & Q』と違いがあると言える。『N & Q』にも世界各地から投稿があったが、ほぼすべての論考が英語で執筆されている（文中の引用ではギリシャ語、ラテン語、フランス語などが自由に使われているが）。投稿規定には英語に限定するという一文はないのだが、イギリスで発行されている雑誌でもあり、慣習的に英語で執筆することになっていたのである。これに対して、『フラヘン』はオランダ語には限定せず、より国際的であろうとしたのであった。ただし、読者がすべての論考を理解しえたかは定かでなく、その点に早期廃刊の原因があった可能性も否定できない。

ベンゼはオランダ人の出版者であり、オランダ語と英語による出版物を、オランダ国内およびロンドンで手がけた。『N & Q』にも投稿しているが、一二本と数はあまり多くない。一九〇七年三月一六日号に出た“Haze”（リブライ）が初投稿で、多くは『フラヘン』廃刊以後の投稿になる。内容は英文学と言語学関連のものが多く、ベンゼも投稿は英文で行っている。

価格は一号あたり二〇〇セント（送料込み）、年間購読料は七ギルダー五〇〇セント（送料込みでは八ギルダー）。同時に外国人読者向けに、一号あたり四ペンス、年間購読料一五シリングという価格も設定されていた（いずれも送料込み）。ここからも外国人投稿者・読者の意識がきわめて高かったことが確認される。

タイトルの両脇には、テニスンからの引用“Make knowledge circle

with the winds, but let her herald, Reverence, fly before her.（出典は“Love Thou Thy Land”）’と“A thousand things are hidden still and not a hundred known.（出典は“Mechanophilus”）’が掲げられており、これも『N & Q』を真似ている。毎週金曜発行という点も同じであった。『フラヘン』創刊号の表紙には、「通信者」として五六人の名前が並んでいる。多くはオランダ人だが、外国人もイギリスの F. P. Bevil Shipman、James Platt, Jun., J. G. Robertson、イタリアの Gisbert Brom、アメリカの W. E. Griffith、ドイツの G. Krüger、ベルギーの H. Logeman、ハンガリーの Sigismund Lintum、オーストラリアの W. Siebenhaar、フランスの C. Snabihilic、スウェーデンの E. Wrangel の一人が出ている。特筆すべきはこのうち Brom 以外の一〇人が『N & Q』投稿者だったことである。一方で、オランダ国内の通信者には、E. B. Koster、N. van Wijk、A. E. H. Swaen のわずか三名しか『N & Q』投稿者が確認できない。ほとんどは『N & Q』と関わったことのない人物だったのである。またオランダ人通信者には、Dr. などの肩書きを持つものが多い。ここからは、国外からは『N & Q』投稿者を、国内からは学識者を中心に通信者を募ったことが伺われる。なお、熊楠の論考が掲載された二四号では、さらに海外からの通信者が増えているが、熊楠の名は出ていない。

創刊号は全一二頁。冒頭にベンゼによる二頁半にわたる挨拶文、つづいて“Mededeelingen 欄”に一一本、“Vragen 欄”に一〇本が掲載されている。創刊号であるため“Antwoorden 欄”はない。そのほか書評欄がある。巻末にはオランダ語と英語で投稿規定が説明されてい

る。「Mededeelingen 欄」冒頭の記事は、ライデンの M. W. de Visser による「De "Hennelhand" in Japan」というもので、日本の天狗のことを論じたものであった。投稿発信地には、ロッテルダムやライデンなどオランダ国内の地名が並んでいるが、国外からの投稿も四本が認められる。「Mededeelingen 欄」に James Platt, Jun. の「Etymology of "Toucan"」と「The English Pronoun "she"」、H. Logeman の「De "Night-Mare Life-in-Death" in de "Ancient Mariner"」[「Vragen 欄」]に W. Siebenhaar の「Shelleyana」が出づるものである。James Platt, Jun. と W. Siebenhaar は英語、H. Logeman はオランダ語で書づける。

ベンゼは本家『N & Q』にも創刊号を寄贈しており、『N & Q』の一九一〇年一月一五日号には、編集部による『フラヘン』についての記事が出ている。「これはオランダ版『ノーツ・アンド・クエリーズ』であり、我が誌の構成やルールにはほならつてゐる。イギリス、フランス、ドイツ、オランダから投稿されているようだ。創刊号には、一七世紀初頭のオランダの図書館についてフランス語で書かれたノート、James Platt, Jun. 氏による「Etymology of "Toucan"」と「The English Pronoun "she"」という英語で書かれたノート、「ゴッド」の起源についてのクエリーと『NED』からの抜粋を回答として示したものが出ている」⁽¹⁷⁾とある。

二四号は全八頁に減り、「Mededeelingen 欄」には八本、「Vragen 欄」には三本、「Antwoorden 欄」には七本が掲載されている。表紙には「外国の読者、投稿者のために」と題した欄が設けられ、英語で「歴史家、考古学者、系図学者、地理学者、民俗学者、語源学者、音声学者、書

誌学者、文学の学徒、そしてこうした研究成果すべてに関心あるものための国際的な情報交換誌」と説明されている。しかし、頁数の減少のほか、広告欄にも空白が目立つなど、雑誌としての危機は明らかであり、実際に翌号で廃刊となつてしまふ。

さて、『フラヘン』を見るに当たつて注目されるのは、徹底的な『N & Q』の模倣であり、さらには『N & Q』投稿者を積極的に勧誘したことである。ここでは特に後者に触れておきたい。たとえば、James Platt, Jun. は『N & Q』への投稿数が約一一〇〇本にのぼり、同誌を代表する常連投稿者のひとりであつた。また、投稿の内容も中国や日本に関するものが目立つなど、国際的な視野が認められる人物であつた。こうした人物をベンゼは『フラヘン』に引き込もうとしていたのである。さらに、『N & Q』への投稿者の大部分はイギリス人であつたにもかかわらず、あえてベンゼはアメリカやオーストラリア、スウェーデンからの投稿者に声をかけている。そこにあつたのは『フラヘン』を国際的な雑誌にしたいというもくろみであらう。そして熊楠についても、同様に理解される。日本からの投稿者として目立つ存在であつたからこそ、熊楠は『フラヘン』への寄稿を依頼されたのであつた。

そして『フラヘン』に似た雑誌で、熊楠を取り込もうとしたのもう一つ一誌あつた。一九二二年二月二七日の熊楠の日記に、「チカゴ市 Eugene McPike 印刷物一（インターナショナル・ノーツ・エンド・キリス出版の見込書也）」⁽¹⁸⁾とある。アメリカのマクバイクから *International Notes and Queries: Internaciona Noturo e Questionario*

の購読・投稿の誘いが来たのである。マクパイクは編集者・出版者として活躍したほか、科学史家としてハレーについての著作も手がけた人物であった。『N&Q』と『フラヘン』の両方の投稿者で、『フラヘン』二四号の「ハレー特集」には、『Halley's Club』という論考を寄せている。また『N&Q』の一九〇五年二月一日号には『Local Notes and Queries』というクエリーを出しており、そのなかで「イギリスのローカル版『ノート・アンド・クエリーズ』についての一覧があれば、イギリスのことを調べるのに、アメリカの読者に有用であろう。独立した雑誌だけでなく、新聞などに含まれる『ノート・アンド・クエリーズ』欄についても」¹⁹ 教えてほしいと述べている。これらの活動の結果として生まれたのが *International Notes and Queries* であった。同誌は *The Magazine of History* の別冊として一九二二年に創刊され、英語のほか、イド語での投稿を受け付け、副題もイド語で付けられた。マクパイクにはイド語で書かれた著作もあり、『フラヘン』にイド語が加わったのも、マクパイクの要請によるものかも知れない。しかし、*International Notes and Queries* は『フラヘン』以上の失敗に終わる。一九一三年に第二号を出したところで、早くも打ち切りとなってしまったのである。結局、熊楠が投稿することもなかった。

三 『N&Q』を模倣した雑誌群

『フラヘン』と同様、『N&Q』を模倣した雑誌はイギリス国内外に広く見られた。本節では、それらを一覧化したうえで俯瞰的に眺め、

全体的な特徴と傾向をつかむこととしたい。

とはいえ質疑応答の雑誌は、『N&Q』が最初というわけではなく、以前から存在した。イギリスで初期のものとして有名なのは、一六九一〜九七七年にロンドンの出版業者 John Duntun によって発行された *Athenian Mercury* であり、読者から寄せられた質問 (Query) にアシーニアン・ソサエティと称する編集部付き顧問団が回答 (Answer) する形式の質疑応答雑誌であった。これについては、『N&Q』でも一八七八年七月二七日号に Alexander Ferguson が *Notes and Queries in the Seventeenth Century* として紹介している。実際、一般的に言って読者投稿による質疑応答欄は人気のあるもので、新聞や雑誌にそうしたコーナーが設けられる例は少なくない。しかし、『N&Q』の創刊以降、そうした質疑応答・読者投稿の形式が『N&Q』のイメージを中心に、固定化・一般化していくのである。タイトルに *Notes and Queries* という言葉が含まれるなど、明らかに影響を受け、形式を真似た雑誌が次々と出され、また *Athenian Mercury* ではクエリーとアンサーだったものが、ノートとクエリーに変化する。「質問と応答」ではなく、「短信と質問」が対をなす言葉として広まるのである。また「質問」も Query であって、Question ではない（もちろん例外もあるが）。これらの点に、『N&Q』の影響の大きさが見て取れるのである。

Athenian Mercury についてのノートが出たように、『N&Q』の投稿者たちは類似の雑誌への関心が高かったようで、誌面に何度も話題が出ている。一八八〇年四月一七日号の M.D.K. のクエリーにはじま

る議論「Local Notes and Queries」はいったん終息したのちも、一八九二年、一九〇五年にも同題で投稿が行われたし（投稿総数一〇本）、一八八三年十二月二十九号の W. H. K. Wright のノート「Followers of "Notes and Queries"」にはじまる議論（投稿数二本）、一九二八年十二月二十二号の R. Hedger Wallace のノート「Other "Notes and Queries"」をきっかけとした議論（投稿数二二本）もある。そのほか、一九六七年十二月二一日号の H. Tiedeman のクエリー「American "Notes and Queries"」一八八四年十一月一日号の Finsbury のクエリー「Irish "Notes and Queries"」（どういった雑誌があるかと尋ねるもの。なかったようである）など、個別のローカル版「N & Q」についての投稿も少なくない。これらの論考をもとに、各種資料から補いつつ、「N & Q」の類似雑誌を一覧にしたものが【表1】である。発行年、雑誌タイトル、発行地を示した。もちろん、これでローカル版「N & Q」のすべてが網羅されたとは考えられない。実際に「N & Q」の投稿者たちが気付かなかったものもあり、たとえば日本で出た『愛書趣味』などが挙げられる。また、「ノーツ・アンド・クエリーズ」と名乗っていないものには特に見落とされているものが多いと思われる。とはいえ、この一覧だけでも、大量の類似雑誌が存在したことが分かるだろう。

さらに、【表1】では、独立した雑誌・定期刊行物のみを取り上げたが、実際には新聞や雑誌のなかに「ノーツ・アンド・クエリーズ」コーナーが設けられることもしばしばであった。こちらについても本家「N & Q」で指摘・紹介されることがある。しかし、本稿では調査が不充

【表1】Notes and Queries から派生した雑誌群の一覧

発行年	雑誌名	発行地
イングランド		
1856	<i>Somerset Notes and Queries</i>	ロンドン
1858-1910	<i>The East Anglian; or, Notes and Queries for Suffolk, Cambridge, Essex and Norfolk</i>	ラウストフト
1872-73	<i>Eastern Countries Collectanea</i>	ノリッジ
1878-90	<i>Manchester Notes and Queries</i>	マンチェスタ
1879-1914	<i>Gloucestershire Notes and Queries</i>	ロンドン
1881-85 85-1912	<i>Advertiser Notes and Queries</i> <i>Cheshire Notes and Queries</i>	ストックポート
1883-98	<i>Hampshire Notes and Queries</i>	ウインチェスタ
1884-1931	<i>Northamptonshire Notes and Queries</i>	ノーサンプトン
1884-87、92-99	<i>Shropshire Notes and Queries</i>	シュルズベリ
1885-1909	<i>Yorkshire Notes and Queries</i>	ビングリー
1886-93	<i>Bedfordshire Notes and Queries</i>	ベドフォード
1888-92	<i>Notes and Gleanings: a Monthly Magazine devoted chiefly to Devon and Cornwall</i>	エクセター
1888-1936	<i>Lincolnshire Notes and Queries</i>	ホーンカスル
1888-91	<i>Notes and Queries for Somerset and Dorset</i>	シャーボーン
1889-95	<i>Leicestershire and Rutland Notes and Queries</i>	レスター
1889-94	<i>The Kentish Note Book: a Half-Yearly Magazine of Notes, Queries, and Replies on Subjects connected with the County of Kent</i>	グレイヴセンド
1890-91	<i>Berkshire Notes and Queries</i>	ロンドン

発行年	雑誌名	発行地
1891	<i>Fenland Notes and Queries</i>	ピーターバラ
1892-98	<i>Notts and Derbyshire Notes and Queries</i>	ノッティンガム／ ダービー
1894-98 99-12	<i>Middlesex and Hertfordshire Notes and Queries → The Home Counties Magazine</i>	ロンドン
1896-1916	<i>Wiltshire Notes and Queries</i>	ロンドン
1900	<i>South Yorkshire, Derbyshire, Notts., and Lincolnshire Notes and Queries</i>	シェフィールド
1901-10 11-74	<i>Devon Notes and Queries → Devon and Cornwall Notes and Queries</i>	デヴォン エクセター
1905-09	<i>Yorkshire Notes and Queries</i>	ピンリー
1906-07	<i>Northern Notes and Queries</i>	ニューカスル
1909-14	<i>Notes and Queries for Bromsgrove and the District of Central Worcestershire</i>	ブロムズグローヴ
1927-71	<i>Sussex Notes and Queries</i>	ルイス
英国その他		
1886-1903	<i>Scottish Notes and Queries</i>	エディンバラ
1887-1935	<i>The Scottish Antiquary, or, Northern Notes and Queries</i>	エディンバラ
1908-15	<i>Aberdeen Journal Notes and Queries</i>	アバディーン
1887-91	<i>Cymru fu : Notes and Queries relating to the Past History of Wales and the Border Counties</i>	カーディフ
1889-91	<i>Carmarthenshire Notes and Queries</i>	スラネリー
1902-?	<i>Cambrian Notes and Queries</i>	カーディフ
アメリカ		
1857	<i>American Notes and Queries</i>	フィラデルフィア
1857	<i>The Historical Magazine and Notes and Queries</i>	ボストン
?	<i>Notes and Queries</i>	マンチェスタ (ニュー ハンプシャー)
1912-13	<i>International Notes and Queries: Internaciona Notaro e Questionaro</i>	ニューヨーク
1962-86	<i>American Notes and Queries</i>	ニューヘヴン
1900-01	<i>North American Notes and Queries</i>	ケベック
1968-	<i>Canadian Notes and Queries</i>	モントリオール
ヨーロッパ		
1851-1960	<i>De Navorscher</i>	アムステルダム
1864-1940	<i>L'Intermédiaire des Chercheurs et Curieux</i>	パリ
1865-66	<i>El Consultor Universal: Notes and Queries espan-ol</i>	バルセロナ
1910	<i>Fragen en Mededeelingen</i>	アーネム
アジア		
1867-69 72-1901	<i>Notes and Queries on China and Japan: a Monthly Medium of Intercommunication → The China Review, or, Notes and Queries on the Far East</i>	香港
1883-86 86-87 91-96	<i>Panjab Notes and Queries → Indian Notes and Queries → North Indian Notes and Queries</i>	アラハバード (インド)
1893-96	<i>The Monthly Literary Register and Notes and Queries for Ceylon</i>	コロombo
1925-32、 49-50	愛書趣味 : <i>Notes and Queries for Readers and Writers, Collectors and Librarians</i>	東京

分であるため、取り上げることではできなかった。ただし、新聞等に掲載された質疑応答を半年あるいは一年分くらいでまとめ、定期刊行物として出版したものも少なくない。たとえば、マンチェスターで出た *Manchester Notes and Queries* は、新聞である *Manchester City News* 紙の「Notes and Queries 欄」から読者の関心をひきそうな投稿を抜粋して、毎年出版したものであった。こうしたものは定期刊行物に準じるとみなし、【表1】に加えた。あるいは同様にストックポートの新聞の *Stockport Advertiser* 紙からは、一八八一〜八五年に季刊の *Advertiser Notes and Queries* という定期刊行物がつくられていたが、八五年に *Cheshire Notes and Queries* として独立した雑誌になったような例もある。

さらに、同じく新聞のコナーから派生したものが、雑誌ではなく書籍として出版されるケースもあった。たとえば、バーケンヘッドの新聞の *Birkenhead News* 紙から、一八九二、九三年につくられた *Wirral Notes and Queries* (全二巻) が挙げられる。これらは【表1】には含めなかった。とはいえ、定期刊行物との一線が引きがたいのも事実である。実は本家『N&Q』でも似た例があり、一八五八年に *Choice Notes from "Notes and Queries": History*、翌五九年には *Choice Notes from "Notes and Queries": Folklore* という書籍が出版されている。このうち *Folklore* の巻は熊楠も所蔵し、執筆に利用していた。

一方で、一八四九年に『N&Q』が創刊され、同様の雑誌があらわれ、新聞にも取り入れられていったことで、「ノーツ・アンド・クエリー

ズ」という言葉は一般名詞的に扱われるようになっていく。そして各種専門誌にも「ノーツ・アンド・クエリーズ」と名乗るものがあらわれる。一八七三〜一九〇一年に発行された *Maritime Notes and Queries: a Record of Shipping Law and Usage* や、一八九六年に二冊だけ出して廃刊となった *Quaker Notes and Queries* などである。さらに、最初から単行本として出版される書籍、読者投稿ではなく著者自身による質疑応答として書かれたもの、ガイドブックや情報誌に近いもののタイトルに「ノーツ・アンド・クエリーズ」と付けられる例も増えていく。

それでは、【表1】から読み取れる点を挙げていこう。

まず、国内から見えていきたい。イングランドだけで二七誌が数えられるが、サマセット、イースト・アングリア、シュロップシャー、ヨークシャーなど地方名が付いたものが多い。州や地方ごとに存在したと言っても過言ではないくらいだ。詳細は次の機会に譲りたいが、これは本家・分家を問わず、『N&Q』というものが歴史や文学、アンティーク・アニズム（好古趣味）、系図学を主要テーマとしていたことと関係があるだろう。これらのテーマは地域ごとの質疑応答・情報提供が有効に働く分野であり、実際にローカル版『N&Q』の出版や投稿の中心は地方史家や各地アンティークリが担った。

つづいて創刊の年代を見れば、一八七〇年代後半から九〇年代に特に活発である。しかし、数年で廃刊するものも目立ち、大部分は二〇世紀まで生き残らなかった。イギリスで現在まで続いているのは、本家『N&Q』だけなのである。『N&Q』にしても、一九一〇年以降

は急激に衰え、第一次大戦頃に廃刊寸前になってしまふ。これらは、一九世紀後半から二〇世紀初頭にかけての、イギリスにおける時代性を反映していると考えられる。具体的に挙げれば、学問の専門化やアマチュア意識の変容と関わっていると予想されるが、今後の課題としたい。

スコットランドとウェールズに関しても大きな違いはないだろう。ただ、スコットランドでは小さな地域ごとではなく、スコティッシュとして全体がまとめられている点が目立つ。ウェールズはイングリッシュ寄りのようだ。

次に国外に目を向ければ、フランス、オランダ、アメリカ、カナダ、日本に類似の雑誌が存在した。主要なところでは、ドイツが欠けている。『N&Q』の一八九三年五月二七日号では、*Pr* という人物がドイツに類似の雑誌がないかとクエリーを出したが、六月二四日号で Charles Burton がないと回答している。

創刊時期は、むしろイギリス国内よりも早いものはいくつかある。これらについては初期における相互の影響関係を考察する必要があるだろう。うちオランダとフランスで出た二誌は二〇世紀半ばまで生き延びるなど長命であった。ひとつの国に一誌であれば、需要があったということだろうか。これに対して北米で出たものは概して短命である。歴史の浅いことが原因となったのかも知れない。二〇世紀後半になって再びあらわれるが、やや内容に違いがあり、本来なら分けるべきであったかとも思われる。

オランダの *De Naorscher* は、『フラヘン』との関係で見逃せない。

こちらについてはまだ手つかずのため、はっきりしたことは言えないが、『フラヘン』が国内の投稿者だけに頼らずに国際的な雑誌であるとしたこと、わずか半年で廃刊となつてしまったことも *De Naorscher* の存在と関係しているかも知れない。

Panjab Notes and Queries は、おそらく『N&Q』に次いで有名な雑誌であり、熊楠もロンドン抜書に書き写し、のちに執筆に使っている。日本で出た『愛書趣味』は、書物愛好家たちによる同人誌的なものであった。熊楠は関わっていない。

最後に全体を見れば、イングリッシュでとりわけ顕著のように、『N&Q』的雑誌は地域的であることが特徴となっている。基本的には、地元のひとたちのあいだで情報がやりとりされ、雑誌が発行されていたのである。一方で、本家『N&Q』は世界各地からの投稿にあふれており、例外的なわけだが、これもイギリスが政治的・知的な帝国的広がりを持ったことに由来するのであり、本質の部分はきわめてイギリス的であったように思われる。『N&Q』が積極的に国際的であろうとしたのかという点は、今後も検討していかなければならない。そして『フラヘン』と *International Notes and Queries* の失敗の原因は、すでに『N&Q』的雑誌の最盛期を過ぎていたこと、地域性にこだわらず国際的であろうとしたことにあつたと考えられる。国際的な投稿者としての熊楠についても、こうした視点から再考する必要があるだろう。

おわりに

本稿では、まず熊楠が『フラヘン』に『Man who painted the Lamb upon his Wife's Body』を投稿するまでの経緯を確認した。『燕石考』との関係、執筆の流れ、さらには『フラヘン』廃刊により幻となった原稿についても触れることができた。つづいて、これまで良く知られていなかった『フラヘン』について、その概要を明らかにした。『N & Q』を徹底的に模倣しつつ、各国から『N & Q』投稿者を通信者として募り、国際的な存在であろうとした野心的な雑誌であった。そして最後に、一九世紀後半～二〇世紀初めの『N & Q』的雑誌空間の広がりを確認した。この点に、これからの研究の課題もある。熊楠の英文論考、ひいては研究・執筆活動は、『N & Q』ぬきには理解できない。そのための『N & Q』研究の一環として、本稿では『フラヘン』や他の類似雑誌について取り上げたのである。多くの類似雑誌の存在からは、『N & Q』が特殊な存在ではなかったことが分かる。それは同時に『N & Q』的な知識の在り方、文化の存在、投稿者の広がりの意味する。こうした雑誌・学問空間のなかで、熊楠は再考されていく必要がある。熊楠はけっしてひとりではなかったのである。

注

- (1) 熊楠の著作は、英語・日本語を問わず、論考と呼ばれることが多い。現在の学術的な論文とは、あまりにもスタイルが異なるためである。

テキストは『N & Q』、『フラヘン』を参照の上、平凡社版全集を用いた。日記については、八坂書房版を参照のうえ、適宜、原資料に確認した。『N & Q』の巻号数については、原則として発行日を示した。

『N & Q』についての研究は、以下を参照されたい。

拙稿「南方熊楠と『フーツ・アンド・クエリーズ』誌―Footprints and Gods, &c. から「ダイダラハウシの足跡」へ」『ヴィクトリア朝文化研究』七、二〇〇九年。

・完訳 南方熊楠英文論考（フーツ・アンド・クエリーズ）誌篇 集英社、二〇一一年出版予定。

- (2) 下記が挙げられる。

・『南方熊楠英文論考（ネイチャー）誌篇』集英社、二〇〇五年の解説。

・田村義也「イタリヤ古説話との出会い―南方熊楠の『フーツ・アンド・クエリーズ』誌第一投稿をめぐって」『ユリイカ』四〇巻一号、二〇〇八年。

- (3) 『南方熊楠全集』別巻一卷、平凡社、一九七四年、五四九頁。

- (4) 『南方熊楠日記』三巻、八坂書房、一九八八年、三四〇頁。

- (5) 『牟婁新報』一九一〇年二月二十四日。

- (6) 『南方熊楠全集』一卷、一九七一年、二三四頁。

- (7) 『南方熊楠日記』三巻、三六一頁。

- (8) 『南方熊楠英文論考（ネイチャー）誌篇』一五六頁。

- (9) 『牟婁新報』一九一〇年五月二十七日。

- (10) 『南方熊楠日記』三巻、三七一頁。

- (11) 同書、三七四頁。

- (12) 同書、三七四頁。

- (13) 同書、三八七頁。

- (14) 同書、三五九頁。

- (15) *Vragen en Medelingen*, 7 January 1910, p.1.

- (16) 正式には『*Vragen en Medelingen op het gebied der Geschiedenis*、

Taal- en Letterkunde といふ誌名である。

- (17) *Notes and Queries*, 15 January 1910, p. 60.
- (18) 『南方熊楠日記』四卷、一九八九年、二一五頁。
- (19) *Notes and Queries*, 11 February 1905, p. 108.

参考資料 (一)

ベンゼからの『フラヘン』廃刊を知らせる書簡(一九一〇年七月
二四日付) 翻刻

Arnhem, July 24th 1910

Dear Sir,

I am very much obliged to you for the contribution you were
pleased to send me, only since the end of June I have been obliged to
discontinue the publications of *Vragen en Mededeelingen* for want of
cooperations, and so I regret to say that I have returned your last
contribution to your address.

I sent you some offprints of your finest contribution, which I hope
you have received.

I am, Dear Sir, Yes faithfully.

J. F. Bense

参考資料 (二)

'Man who painted the Lamb upon his Wife's Body' 翻訳

「女の腹に羊の画を描いた男」

「ロンドンに若くて美しい妻を持つ、小狡い絵描きが住んでいた。
あるとき、仕事で出かけることになったのだが、彼は嫉妬深い男だっ
たので、妻のお腹に羊の絵を描き、帰ってくるまでそのままにしてお
くことを承諾させた。妻はそのとおりにした。羊を描いて、絵描きは
旅立った。それからすぐ、好色な若い独身の商人が愛を求めてきたの
で、妻は受け入れ、商人と寝ることになった。商人は何度もやってきて
は繰り返し喜びを得た。あるとき商人は筆をとり、女にはもとの絵を
なおすだけだと言つて、羊に二本の角を描き加えた。そして一年ほど
たつてついに夫が家に帰つてきた。そして妻と寝た最初の晩に、お腹
を見て、二本の角が描かれているのを見つけた。彼は誰かいいやつが
できて、そいつが新しく描きなおしたんだろうと言つた。だって、お
れが描いた羊に角はなかったのに、こいつには二本あるじゃないかと。
それに対して妻は一言(以下欠)」「『百笑話』一五二五年頃初版。ハズ
リット編、ロンドン、一八八一年、一二三―一二四頁。

これらの類話について、以下に示す注は、『デカメロン―その源と類話』
などの著者で、私の友人の A・C・リー氏によるものである。

「これはドイツの古い民話に見られ、『これがヴェルツブルクの絵描
きの話だ』(ケラー『古いドイツの手稿からの物語』一八五五年に再録)
と呼ばれている。編者が述べるには、「これは一六世紀イタリアの小

説家ピエトロ・フォルティニの作品にもあり、『描かれた羊』（二八二、四〇年）というタイトルで一二部しか刷られなかったものだ」という。焼き直しではないにしても、模倣したものがジュゼッペ・パリーニの著作の第四巻にあり、フォルティニの『ノヴェッラ』の巻末に収録されているほか、ジュゼッペ・ジランディーニの『イタリヤ小説集』にも出ている。バッチョという画家が妻の腹に羊を描き、フランスへ行った。―妻は別の画家とよろしくやっていた。バッチョは帰ってきて、羊に角が生えているのを見つけた。不貞を働かれたことに気付いたが、恥を忍んで黙っていた。注はこれだけなので、これ以上の説明はできない。この物語は次の書物にも出ている。『出世の方法』は、一五九三年にツールの聖ガシアン大聖堂参事会員を務めたペロアルド・ド・ヴェルヴィルという人物によって書かれたとされる、艶笑譚を集めた非常に特異な本である。件の物語は七四章に出ており、年老いた絵描きと若い妻について述べている。しかし、こちらでは羊の代わりに驢馬が描かれる。頭と脚のほかはすっかり消えてしまったので、描きなおすことにしたのだが、どんなふうだったかまるで忘れてしまっており、鞍を描き加えてしまった。夫は帰ってきて『わしが描いたとおりの驢馬だ。でも、この鞍を描いた悪魔は誰だ？』と言った。それ以来、『驢馬にまたがる』が『女とやる』の意味で使われるようになったと著者は述べている。この類話について、パリのガルニエ・フレールが出版した、粗末だが素晴らしいリプリント版から注を引用すれば、もとは『寝取られ男のための契約・贈与等についての愉快な規則』（刊年不祥）という本から取られたものという。小さな奇

妙で貴重な本で、ベノイスト・ド・トロンシーに捧げられたものというが、刊年については記されていない。この種の物語は、ラ・フォンテーヌの『寓話』のなかにも、『鞍』としてごく短いものが出ている。『これはブーシェ（一五二六―一六〇八年頃）の『物語集』三巻二八話にも出ており、『出世の方法』とほとんど同じ内容だが、愛人が驢馬に鞍の代わりに馬勒を描き加えてしまうところだけが違う。そしてブーシェは「ここからフランスの諺の『悪魔が驢馬を連れてきて鞍を付けてくれる』が生まれた」と付け加えている。一六四一年頃に出版された『ウーヴィルの物語』にもこの物語は見られる。前述の『寝取られ男のための契約・贈与等の愉快な規則』の刊年が一五九四年であることは、別の資料から確認される」

この物語はインドに起源があるように思われる。というのも、一二七九―八三年のあいだに書かれた日本の仏教書に類話が見られるからである。それは、

「遠江国の池田あたりにいた庄官の妻ははなはだ嫉妬深く、庄官はほとんど監禁されているようなものであった。あるとき、知人の地頭代が鎌倉（幕府のおかれていた場所）から池田に酒宴にくるようになった。庄官は陰部にべったりと糊を塗られたあとで、ようやく地頭代をもてなしに出ることを許された。庄官と会った地頭代は、すぐにこんな助言をした。陰部の様子を召使いたちに見せておけ。それからお前の好きな可愛い遊女といいことをするんだ。そのあと、もとおりに糊を塗りなおして家へ帰ればいいだろう。庄官はこの助言に従い、それとおりにした。帰宅すると、すぐに妻は糊をこすり落とした。それ

を舐めてみるやいなや、妻は怒り狂って叫んだ。『この悪党が！ 駄目だつて言つたじゃない。私は糊に塩を混ぜておいたのよ。でも、これには入つてないわ』。妻は庄官を殴り倒してきつく縛りあげてしまった。こうした振る舞いにうんざりした庄官は、まもなく妻を捨てて鎌倉に逃げてしまった。これはつい近頃のことという」

「ある古い物語に出ているのだが、妻の不貞を疑つた男が、妻の下腹部に牛を描いてから他国へ旅立つた。留守のあいだに愛人がやつてきて、飽きるほど愛しあつた。それから、腕の良い絵描きであつた愛人は牛を描きなおして立ち去つた。帰つてきた夫は妻の身体を調べ、きつくとがめるように言つた。『これは愛人が描いたんだろう。おれは寝ている牛を描いたのに、立つた牛になつてゐるじゃないか』。これに妻は『そんなこと言うのはやめてよ。寝ている牛が一生立ち上がらないで生きていくとも思つてゐるの？』と答えた。夫は妻の言葉にも一理あると思ひ、許してしまつた。こんなふうにも男というのは、女にくらべて考えが浅くて鷹揚なものである。しかし、このとおり、男が女より馬鹿であるように、男は女より罪が浅いのである」無住『沙石集』（七卷六、再版、京都、一九〇八年、二七〇～二八〇頁）というものである。

南方熊楠

田辺、紀伊、日本

附記 本稿は平成二〇年度南方熊楠研究奨励事業（若年研究者助成事業）による研究成果の一部である。